

# 慣行作型との組み合わせに適した イチゴの厳寒期どり新作型

野菜部

## 1 背景、目的

本県のイチゴ生産では、12月～2月は販売単価が高いものの出荷量が少ないため、この時期の生産量を増やすことが重要な課題です。一方、この時期は3月～4月に比べて収穫労力に余裕があるため、この期間に収穫する作型があれば慣行作型と組み合わせることで栽培面積を増やすことも可能と考えられます。

そこで、市場競争力の強化と農家所得の向上を図るため、新しく開発した小型紙ポットを活用し、慣行作型と組み合わせることで12月～2月の出荷量を増やせる新作型を開発しました。

## 2 成果の内容、特徴

- 1) 定植前に白マルチを被覆したほ場に、小型紙ポット苗を密植（約15,000株/10a）することにより、12月～2月のみで約3t/10aの収量が得られ、これに慣行の作型を組み合わせれば12月～2月の生産量を増やすことができます（図1、図2）。
- 2) 新作型における苗の最終追肥時期を8月21日頃とすると、低温暗黒処理を行わなくても紙ポットの冷却効果で花芽分化が早まり、12月上旬から収穫できます（図1、一部データ略）。
- 3) 新作型は2月で収穫が終了するため、新作型10aと慣行作型20aを組み合わせてもピークとなる3月の労働時間は増えないので、現状の労働力のままでも導入することができます（図2）。
- 4) 新作型の経営試算では、小型紙ポット関連の資材費が14万円、施設・機械の償却費が93万円となり、157万円の所得が見込まれます（図3）。

### 3 主要なデータなど

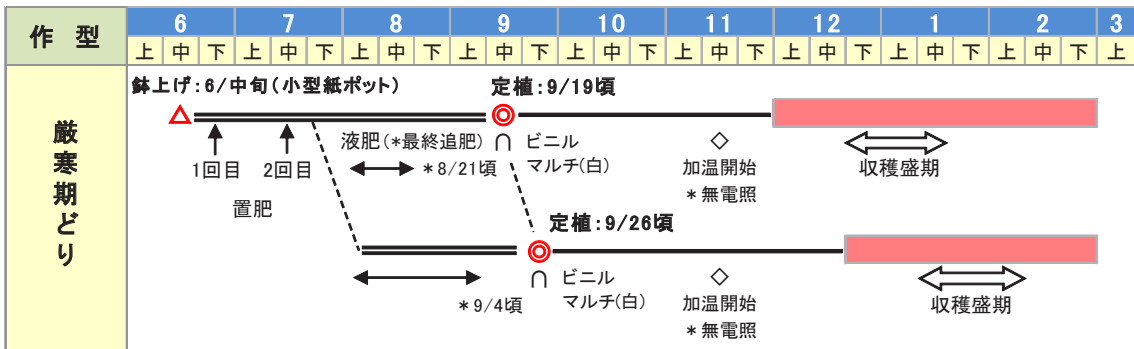


図1 イチゴ「あまおう」の厳寒期どり新作物型図

注) 冬季のハウス管理は、加温設定温度5℃、無電照。

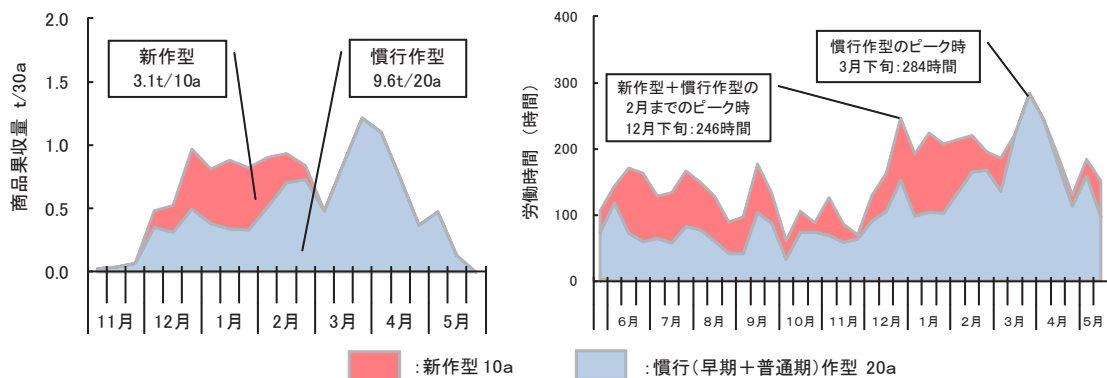


図2 新作物型(10a)を慣行作物型(20a)に組み合わせた場合の旬別収量(左)と旬別労働時間試算(右)

注) 1. 新作物型の収量は、平成23、24年の2か年平均値。  
2. 慣行作物型の収量は、経営技術支援課資料を基に算出。

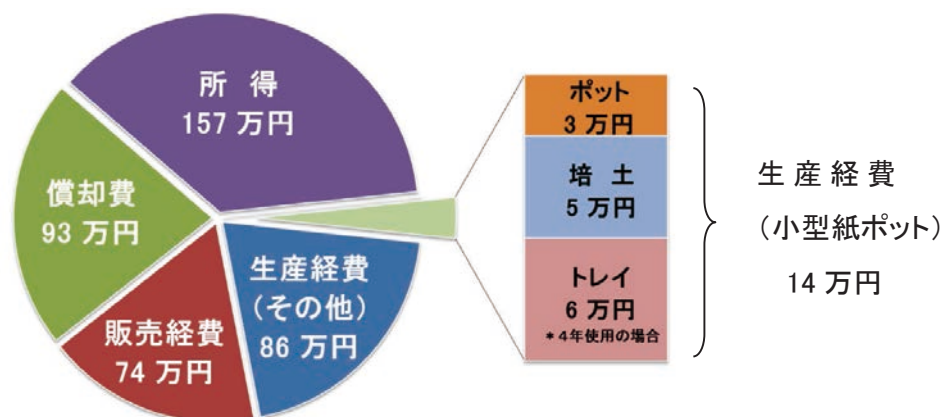


図3 新作物型10a当たりの経営試算例

注) 1. 12月～2月のみの収量3t/10aでの試算。  
2. 償却費は、パイプハウス及び付帯施設新調価格による試算。